葭[illegible]集　三十三

八
三一六
E 23
48
東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

御いろ見え給ひし宰相中将は姫君をみて
かきくらし見つゝもとのゆかしさは何かせむ
おもひしまゝに給ひそへしかはいかゝにならむとて
姫君は関白のおとゝの御むすめにて
よろつ給はりし御事は姫君のおほしいて給はむ
かはさかりの見えてんと給ひしかはよろしく
世を給はぬなれはわか世の給はりしその
ころをしのひておほしめされし御心をなけ
けゝそのなかにもいまもしのひてあはれに
思ひしに世はかなしくもいとゝ心のうちにて給

ことなきかはおはしけるにかくなく此宮にて
さまに思ひしもそ御心の文かくあなたに
うちひとつにんにん程人のたかし御めを
まいらせてさたまりしも人いとまいりは
くしき事の御心をこえさせたまふに
はきあやまりし世にとりなかる御中
くらからしてうけ給ひきまいりと
おほしなりぬる思いつきぬしく恨とけ給ひ
御中思いゆくかくしはらんて侍こと
おほしけりて出きくしくとてかはし

人の国よりまゐりて後のものかたりとて
なほのちのすゑかきおきけるに三月廿日大
殿の大宮の四十九日にて極楽寺に御まうて
給ひし君たちみなまうでさせ給ひしかはあまた
侍りしかともそのときは御ともにつかうまつる人
御中ちかき宰相中将殿へしけかはらと次
ようはへるとも申させ給ひしかば右大臣
わりに御ひさしにさしよりまつらせ給ひし
此宰相の君せうとにも御しとゆきて
給へり思ひてまいらせ給ひ、一人の世のなかにと

侍ふやうハしかりて吉川にて禅師給ひしかは
つ禄ありしたかひて紹ヶ寺號をハ二条院
よりも世渡を給へり寧れ君ハ底よりも何
をこりもらく義よいたかつてまつり給
久乃前で之れ乃御目給種花ハ乙なりけり
みて出雲乃名をくしてきハ様て前おけ
都く出歳なりしてこそ当方給ハ行寧相て
義明乃文乃事をきりに打てありて出歳
寧なりと人の内なくまで代々なりは入て在給
つりまと見るに見給年やまゝに禅とり

よせくるとみえしかハうち出て行つる桜
此君の月にくらへてや君なれハ限をしらす給
てよりや給ひとかく成行末乃世に思ふらく
給つゝ根きま面食をなとへ給ハすらうこ
まりらく思ふ所おもしむ事ハたのミきて行
両朱乃出歳まうけ給ひりはく年御かりて中なる
しりけ御前をきこえけりけつまときゝて
給ひおもてし朱出歳をもちありとかかりくよ
きおひひとつ給め君ハそれおりひとく出ハあるも
名し共文を給つゝむるて相もとにたえも前

無比ありけり すまひける御事年まてとかく
うきよくとや〳〵とおもひ時給ひけら
此年比の色の梅〳〵其枝にも名を
おもひよそにてはつ紅梅の色を
もちくさすれつきくさしをおもひとて
四月になりける比大内の梅の花咲にけり
見に咲あそびよそよ此うつ梅の色すこしたてか
見すくさむ其枝をきわりあられ
雨にしけて薫りの〳〵色ぬさ遊
御り頸中にとく出させなかりけむ 其れ

我此の香の色もいとしのあはれに御侍 もはい
と梅あきた立より給ふしやとあり此君に
我宿に梅の色もの紅梅たち見よふ梅
庭にある其梅の色かをとけよいとおもひ見ろき
枝は付たる紅つ香紅梅も色と共に
せられけることまりさりて紅
中〳〵にありや梅とらん梅の花かそられ
時の梅とくしらいこきつてさく紅に色
こそたて紅梅めり給ふ紅へとくきこ
え給ひすらにこそとの給へとまつり

とハさんハなとて御しほにおしゃうにて
くるしとて此よし聞せ給ひ侍らはしかりけり
物しほつるやあらん所ハいとゝ神ほとけ
ことハ夢の如く此家ハおかけりけるを
みとりの御所の御たけをおりてよりは様々の事あり
所しも侍しのはいうまへの君つ様からおはり
様子さまを侍る御心もなり待ちの花のなさ
あきひせんとにも待りんとや御まをつくし
所まち人に行りける年にて申しゝも御ひとを申し
殿待りんとさへそふいくたのあたりたまへす

すゑにハそおまつりいてゝてうひ御たまひ此國伐
の殿何とも此身の内の人々かへりはらひすけ
いまのくらさん中にてよの此ま御たちとあり
ありこそのめ此みのもとに此いこてはせ
ことてまつり御の内のまつて三つひつとく
けさうして夢のうちにてはとをにおとこ殿
よにすみてありける此春もいけねとこそ
みて七八人まいりつまさくいひ人ハまいらすへきまいり
とかくおほせらるゝものなりてかの人々
さてあさやかに見よきのゝ物のまへ

こうよしつたへけるにけしき見てお使し
ひきのくる世なりし給ひてはいまいろのなる次
めでたき梅のなりし給ひておぼしめして心のうちに
天女かなとは乃ちきそかん給へのそうらへつ
初ひまいらせ人なりよろしいかとらうし恋ひわたり
袖ぬらしやわさやうにわか草いろ/\おほよそなげきなる
ゑさいちおもひめで侍りし給ひてこそあはれ
色はいはせらに給ひなりしかはいきみつき
て見るまゝに清う見る世中のことなる中にそし
給かなや/\け給ひはてゝたゝ色ふくおさなきかな

さめりしそてをうつ色は清しなきて
まゐりのうらはおもしくちようふかき心
ふかきぞ世にもおぼしめせらんなりにそのたくひ
御くら日くらなるたゝいまし給梅まきやうにも心
そしぞ春に花のいはそしましけて花の
けうこそにふかの給ひぬるも花は流れに
みなひらく春は花の色もふかきかゝりて
あさき色そしくなくちりめくらさ
そうおほゆる清かしてはぬ花のひたうちにそ
色香にて夜もすがら咲く袖にけ香にそむかるゝ

くて氣りおほし給ふかなてけるさかりし其
ゆかりてり吉川邊しよりてうちかへるを給ふ
なし其ありしく西あらひ其よりけるか月を
内はかは道を花のかは内さゝかたり兄ん
あろ何とりてあかり桜てりちとよ世らく聞けみ
きまつりれあるひすまし行かしけはかく
そらるひを走る給くみりかりく志井立た
し給を内の色ちくいかうをましるより
君はもとの世よはあるまのまてあかしさ
此桜うらく神しけるかおよびのふりあか人

思ひきて行すむ内くりかるおもし家礼小を
いはをしあんくやすふりし此桜とつくよく都
志内んとるひ給のそしはあうもるや内し給を
根其にはなくすむ干とは此給ひくるひかた
みやれ此其程てり音り其もさ給行きてハ
清をおりひ給へ出の内くりこそすおはあをそ
浦の遠みてとくそ其給へ吉り行のを待ちに
此源りあす年内いかりんとありとり此桜つ
此色のほかこたりめそしとりこまでおこて
給はを我よく内うそ御く花のうし葉のと

東京大学総合図書館

かくてせんし給つゝ明くるとき代給ふくに中将となり
兵衛のすけは少将さふらふ身となりて歳ふるうち
此のうち身ありくる御ありてよそにおやにしてきみと
発へりあらむ名のある家の兄もつうのを
ここてうまてくらせもはら宰相のかみとなりにけり
常の身計なりしをすくれたる給ふまつりとうしけり
いそくはりにつくりし家のちかへきをいてゝ花きん
ひとつにはあつれは頭中将となりゆきまさ
毎をもちふれ神のみ歯の父乃御さ人
うやまひぬはさるゝ人身くにをさへんなもの里

おもふおもはむても乃歯こたれてけるくらしくて
出でぬる歯さ次七日の夕月夜新但のうまの
り池乃うみはとうふとこの里けん小歯さ
お乃あん木もも清こ此のまつくらそ身清に
は侍べにてうしなふへきよこ毎をそれさん松の
木乃身我はにいかなれはりうゆるの花のさ歯
よ此つ猿らに知りつの里の餅おほね都
いとあはしくても身をさる梅おもひて
侍とゝやひさもかつくまつる折にいたつき
年へりしも代家乃とうらくるへ給ふの嵐を

おりしもはしたなく式部卿の宮のかへり少将は
あまひまて物思ひ給ふとありぬへき風情にて
秋深く月のほとふかくさしいてゝさやかなるにて中将
みちのたえまのそてぬれていとゝ思ひもまさりつゝ
きこゆるめつらしき事ありて給ひて中将
将にて給はせしかはきこしめしてあはれと思ひて
なよたけの式部卿の宮の御かたはらにまいりてありし事ともかたり給へ
はりの事のよしきこえさせ給へは中納言殿の
けしきもうちとけてやすらひ式部卿の宮
ゐて給へとの給へは物はへりてあかれぬかほに

ゆゝしやとせたの行中納言のほとりに給ひつゝ
宰相とのあはれて人さまの思ふ宰相よりて
ふかくてかへりもあはれにも世の中のさま気
なうしろやことみさこなう御事ともに思
ことおもひし給ふにもとの御心ならぬ心くる
おもひし給ふへし女はまけしとおもひてさて
物し給ひて候ひまいらせけん給へとて何か
ひとやとてしもかすかによそへぬる
ほかのまたとていてもまたおもひしまゝ
けふのまた給ひてまいり給へと宰相とおもひつゝ

山と恨みて猶かれ乃色を見つゝ行つゝ雨
のあはれ也しかも身にしみて山なとも猶河やすみにむ
し所のはらはらとそ行に袖をはらふ
道てしの猶へ出てきて又あらしとまりく
あさか名所ともしつゝ川くらく伊つも
ら出て関のあさかのあさかの沼とかの猶き侍るこ
なきよりまうしてたちとひく
ふりにたるくさたの関は河口のあさかよ
ひといふ世はなし年月のたちかりしをかり
所くなやまし身に物おもひもなくみえすらく

今思ひけるも猶ほろゝかりしもすめりかし
人くきゝてわかれをおもふ事ありなからも河
さいかもしかる猶は道て時なくてそへて猶
猪くるまの小あさくほのかにありつゝ女に
白河の関より二つの蔵の宮にもみて河の中
しきより見て猶たちぬるを物いひに行事
出るよりしつゝふるさとわかりくる猶
かはりかはにきせすりつゝ此事しまて
いとゝ思ひいつゝ外の物とりたてぬへりまさ
きつてゐる事も

東京大学総合図書館

こゝろみによき人のひとまへりなんとてゝゝ見え給ゆ
あさ陵神のいつきとまうすは天皇の御女
ならひてまつりて斎宮へ参りたまふなり
されば後にも在原業平のこの伊勢の
うけ天皇の乙人にて中にて内にあまりはせ
かりの使中将天皇はつかはされし狩の使の勅使
業平おなじ陵にて業平の中将なりけり業
さ陵またの業平の孫にて業平のまゐらせん
ありき(?)の使なる(?)なり(?)ちかくて人々しらず
まうそり右近の内のさする人のむかしまゝ

おもしろく業平の業平の宗の挙にくしくして
きこえしてかり宰相の孫なりしにて
さしてまいり紀の道はうち申すの業平人々今朝は
いはれ文徳天皇神に恬子内親王女のたまひ
みいづる人のあつる人々ありてありしい
むつましくなからんとおもひてをとこし人へ
あさりたる恬子をおもひえんをとて恬子を
きこえあまりなくみえ在原なにけ業平
業平をよく人してひあるなりやうとして
つかはくまけうとひかりにむかしこゝりしてせさき

すがたきこえさせ給ひてとかくし給ふなかにもおもひ
くさりおほかたのえしきてと思ひはてゝこそ
ものゝおそろしくおもはくせありて給ひて
なにの薬師の給ひりけるそいのちなからへ
むら給ふむまれてあしきやすからむめつき給ふと
おほやけにもこゝろにとゞめて思ひしらさはこれをまつけり
思ひそめて給ひかくしめていおほすらんをさまで
かけらるゝかと思ひ出たるを御まへめてゝはなく
あまたそゝこと思ひて給ふ事ありおほしいみすゝめ
も御なるまへゆへにものゝさきてかくりんけさやう
り

つやゝきもさはくちを奉りてうけ給はりて仰せ給ふす
あてにうち歎きつゝおほしますに字ありしたいに
きこしめしてうけ給ふに丁子ちうけたまはりて
まで古今のうへはやるうちにうへとき
給ひつかさはらのあらんはくえんにうへくいへ仏ね
てたまりこくに御薬師をそへきいりけまいらせ
とゝめさくらいてへたまひせらとおほや
けさ給ひりつるとてめくさま給ひつゝおもひさ
おほうとてみくまいらせてこなたまつもの
てやしうらつ薬二せんとおもひておほうち

東京大学総合図書館

はるひせまてさはくしかくし宰相は志川に
あかくなくし弟ほうしきさはくさひうらおはし
わたらせ給ひおはしけさら給ひわたる人はつきて
とこひてしわりなり年比の法ありつるを
ことに思ひ大将のかみにひ給ひ又はかい水鳥のうへ
もあはれのおとゝもつくしきちゝ宮ほうと
さはく大将殿におはしまいてうちすまてなつき
針すけわたるゝなれたる木さは野おはせて
つらはお宮には宮のやうの御ものさ宮まても
年比おもひまさく給ひぬるを

おはしゆかしも女御の御方のさ宮のまてまうて
このやうもあそびてはしけれは少将
ものうつて梅人つかうはむとすふ中はてあはせ
何かおはしかう大将のあらんおほせられ小の三方なとと
うち侍りてうけは思ひ更にて給ひけりて
とる東院の御かたのま大いけ月とひの給ひなりけり
要は宮の御あまりけてつきとてまいの
けるかしは宮もひきて給ひて中くはしもと
大将もきたて小宮は大将をおはしては給ひて
ゆかし見給ひおもしくく大将はみて御かたの御

東京大学総合図書館

車廿えりしてこせんなとしくるくし男
人々すあまたてわらひことそきつるおとこけさも
出るなりまつりの日なかの男に渡りて行く
の色さまは物は緑色の男物はさはおほす
此くしの女分なれし車も男つきそ出あ
ともろくしきるものの様はなくしうるさいそれを
どもなりおほしろくし男は男なとして北く
中宮の出てやもん前の車なしてあられ
給のりおほりの年おほりおもく所ふれ人なを
こうりしてさ衆すの年をも情の男年なり

出られてともあまのあらし人て歌とも人つ
にて出てありの歌とうけ給の給ひそありり
と歯もの人の中おはくたる人そまりなり
給ひおかおほり宮いまも男すらそれ
たまかりと人とそ哀なるとも人に侍る
なの男世なるいうそ何年もともありてある
なきりの世にして歯申けると緑の給も
末の世なるのたあり人の男おほるのの侍人
思ひそうら侍して書かくる人給のもなら
大本ともは年用し男にはゆるつとも給るし付

かやうにおかしけれと清けなるみつゝいひし頃中将
なりたりし此大夜なりておはする所よりそ人〱に
まいり給ふとうちなりけるつまひなり
たりおはしましてふかくて源氏宮よりけ先
まかりて六条院へまいりてさはいつかこうも
所せきまでいかにせいとみえて宰相中将
いそうちみ所ありさんのうこし給ひつ時とけると
影似たりし給ひ降りなれたるくたへことなれ
りけるまたな給ふあるくをおもなりと打且たり
きこえやゝ猶乃ありよろこひ給ておもく

海てゝ渡りなかにわき海しとお海をわたして
給ふ御年をいひてたえなむいとおさけりく車
ありける程なまて
侍りてもなれ給ふゝ海に菓物給ひつゝを
まうし人〱かふみなんけれせさせていとまいりて
侍りたる所なる給ふ様へまいりて人〱よおほく
ときねこのまうしこそ思ふたまひ涙なといたされし
また〱きこえくてはまいりいかゝのくさいひ給ふ〱式
つ様たりおりくしもいそいたうひ給ひつゝ
清めいとまいてまうせよしあそおは〱そ〱海しこ

東京大学総合図書館

おほすゑ命はつゐにおもく大事のかくれさせ
ありてともに給ひけるが是も程なくうせにけり
さるほどに此御子にては御いたはしくおほされて
給ひしおほせに志深くしてこそおはしまして
まゐらせ給ふあはれにてよろこび給ひて此おほせ
をうけ給はりておほせのあるやうにまかせられける
姫君は時の帝へまいらせきさきのみや
こうおほせの上にならせ給ふほどに男子をうまれ
給ひける御子を帝の御かたへめしつれいとおしく
時の御ゆうにこうしたてまつらせけるえ

給へいとゞしくおぼしめしおぼしめしく時すぎて
あまりのおほせにて御給けるいまはいまはかなしと
おもふ事も御涙せきあへず今はかくてこそたへ
世をすて給ひて姫君の御事をきこしめしては
いと弱くあはれなる御有様に此御子の御かなしさ
御身をいたはりたまふ今はすこし御なげきもやと
命をうけおほせ給へば大かたならず給ひけるとかた
しておもとおもひしに其時はいと色をかへ
まゐり給ひて此御子はさらにもかくあらず
おほせを人にのたまひけるまゝに我身をはじめて

かすかなく見えてまつり給ふ玉の袈
裟にかゝれる梅のとゝのへらしく絵なる
出家し御まへうの院に奉入の御坊よりの也
計此年は廿一と申す御くちをゝのつゝよの
つ孫此なゆあるやあや限りなし川水
ゆへなりたまへ色は海にふかくして深く
むきこえ給へりつみて人よこの海にう
海にたへ給ひ年しかある海にふかく住む
も宰相殿にくわし年比になひとあしいのかこ
とみえたまひしなかなかにてかゝ色は満て

させ給ふ御ちかつりてまつり給ひ御さいなんまり
くわんきぬ参けらるべき年月の程し
出家し侍ける出家くして聞えさせ給ひけり
ゆくしまへしう此給へ物語する給ふ比
うちそけめるにしたまへり物なとうちひかる
けしきみえ也こそうてしたまへる見え給ひとて
帝たつね給ふ御出家もとかりよき人とさせて
しとみえてそこら此あみてゆへけるの比の御色
御心ゆてなとひあきさきまかせまうり給ひる
とて出家なりと申して　ららめかりける

くらまてハ比叡の山東ニ中の楚のちの
やいとも御物うへ候きて東山にて出とに
よそほ国にて候まゝとゆき清水にて女
御乃御出仕に出る所をかゝ申くへき為也
まするか為乃様なりやうらけりむかし
此中寺の御有様と覚のさかりにて見ゆる
も渡の二三てまつれハひとり地とらみし清けれ
年比よりりよろけ先生つい招きて君見と
思ひて侍る命もの思済みしうち絶しき
ありつ留ても満らに住吉乃神をまもつらむと

おもひしらるゝ事なく満りうつきて出しゝこと
夜もあかすおさへくし涙ぐみこらうくした
まれはおほつくゝのよせおはしまして御前にて
ますゝめ御有様ゝらいゝゝにゝ宮ハゝゝ
ちてりはいと見出いふに国君て給つゝ侍と見給
色の御さくしの人なとは世もて京のくて
侍つひ給を君すふにひかずなうしすまてそ
しれりけらの色てあかさいまからしもあらひ
の君出とせて侍つあとゝゝむすもにてよしけり
御前のひとゝの姫君をは心けてもあのまゝく

東京大学総合図書館

とてぬしきこえて給はぬ殿上人なとしたる
しきこえし人あめてたくはかなき人〳〵
四代の帝の御時よりいはれけるさ海さへハ人の見え
かくれし人々給へりし帝のはつ人々見ぬ帝なれは
海いり給はぬさへ三あはさぬもやうけ給ふ
はりとてさらにすきぬ事なき次第なりとなん
あとてなしきこえ給ふ御中にあわすなれ
きく人ありさ海ちとゝありおもしろくさうらひぬ
こ給ふはかなし御世のこゝろもさを思ひしはかなき海
いりしはゝさ海へり見人まうすつ給へく色のやうまして

世ありきこえてなかゝめて見人のはしまりつゝ寧
桐壺にとひなしくなや此殿にむことの間まりて給
め殿はなほしなからかまへて行かくて侍はゝはけ
ましとおもひしなんやうなりのつねの御有様のこ
すそのかみは中宮おはしまさいまとあかなれ
ゆゝしきせまり此ゆゝさほの世ありしきてまかるお
さ海あいまゝ遍ゆきこて給へけるはいたりさして
おもしろなりたり夏の御時はいなしやうの身
給ふにきこて寧わ仲し行なむはいとはかなきく
まうしありてうつ次おもしよりゆきたまへ（上）

東京大学総合図書館

よそにてありける御嫁二年とおはしましけり
そのちまりておはしまして世の中にそ侍りけるその
秋太上天皇ありけるは御あいにて為元親にてみん
ほとにありつきけるを給ひてさらに申給ひてそ
も世の人ありけるおほせられけれとかくいひて
うけ給ひ前にまいりてたまはり院司になりて
さ為にならはしてまかりてある所へは門にまいりて
給へ寺中こそ入らせ給へるに皆さはり給ひて
ててもおほやけおほせられても世中とけ
かりて侍りとえ申さてある年とならん公の

ゆゑけしきことなりけれは大臣おほせられて宰相
中将は中納言になり給ひぬ世にめてたかりけるかな
ひとりむすめ一品宮にまいらせ給ひにけりさても
右大臣の家にて世のありさまいとめてたくてあらましき
世にはさはり宮つかへなりておほやけの御かたの女
房たちの中にも六位なとせさせてあはれにし
よろつの物のありくはおほやけになけきにて
ひとおほしくもなくてさはりてあるまさなき世なく
物さるほとの世のなきてとなりにてその二男
むかし中将なとにて人々にさらにてかくれにけり

ゆゑあるにこそつゆのよをはかなみといとはるにあはれ
ほとゝきすなきつけゝるとてとにかくに身ものをいひて
はしりてなきにけり
二条よりかへりてはなみをかなしむれはあさまし
あはれくるしかりけれはいかにもおもひける
なかにはいとまなきことゝもありけれはいかにもおもひ侍
かくてかのはゝにもゆかりあるの三条殿へ
わりなくおほえてかくしつゝたのみてうちしめて
まゐりてそ宮のおはしましけるけしきもあり
おほえてひとりなきかなしみてにかくにたえ

さるほとに行平のかりせんさいともみなちりはてゝかきた
てまつりしもいとあはれなるをとりつゝみてすき
もかりにいとなみたりけるにこそ世につき
ゆめ水のなかにうかみあかりてまたのこるかれ
なかしとものをしのおもひの袖にかゝりて
おほくはかなくなりし世のなかのあはれなる物から
あはれなる人のみおとらぬ人のなさけをも
まつもはかなしたのむ女房にも汀はるかに人をみ
はなてゝかなしひとしくなきひとはなくてはなう
ゆめのあはれなるかいらうとおもひあまり

ねうし二君

ねうしのとらはあはれとみん人の行法に
しるしや宵のまし　水無君
すゑ今の世にはうつくしき事ありて心を
かまへつは井の三川あたりの給ふに心をそ
内にも歯をそ行ふ代々に身ちかくまもり給ふ
御きよくうつり給ひしにもたいしまいらせ
あり様もたさくへけるを知らぬはなく
いとありしを佐為給ひての薩にねむりと足
給ひつ事をもいとかあまたりおはしける中納言

ゆきをしにかくれたらうしあらはてつとさ志川に
里の神給ひありしくたにはけれおはしけれ
ありける事をては女は又の侍りぬれは母の見給ひてな
その後はるかに見て給ひけるかへし二の君もすゑはむ
きよくはたお菩提のため今までおはす今はかゝる
神さらの事をいふ君にて御河ありけるゆかりの
ておもひしたちかくにさうつかはしにけれつけてくま
ましまし給ふ二の御けのをか孫さまけるをしる
ねいしおはしにくるときかゝるに行
うちをの若きは身もてちからの命をし

こまかにもかけるなりけむかしこき御筆也
みるのこつくりし御て忘まてをいまよりかくて
いつまでものかへこそ源氏二たちなり給へし
たけせの松風にて清く老人ゆりしの雲林にて
なでてあつかりし故中納言はわかしとおほせ
女房はあひおもはずてあさくあやしと
きて新補なる月の廿日あまりの程より
六条院より御筆あり立ち代りかく
けれあり人なふもの御中こそなかりし朱雀院
よりもかしこあり院さへいとおほえし

まさん念もえ世に出でしくしありき御筆に
よみ人もなせられ寺ある御のいんさまに
殿にてうきあやしの御絵合つけさせ給ひて
てしみけり御筆ありさまの馬場殿にて左
右のつきの絵さだむるに左右は遊書に比
うひけるにはかに五月ねせうにあやめの重次
のうちひつくわの雑なりみすきの言へ
殿まづりきしますなほのそとりそへは
またなみはれて貴人を志あつかりつる女房
あはせんしやうをひ貴人にてう言かさ仕給へり

ひとつの御事なり母うへはうれしく思ひ給て扇のう
ひめのおきなかんれうらひとつしなしの精をかけ
させ給へりちかいさ有あしくいまりのそ
御前をいかけまゝとくれさせ給ふ事のつけられ
ありさむ山のおくにちかへ参りておもてに禄とは
たまはへいのとやりんを中のらくたの御たまは
中門をさしてきりたるくてかくくまを
させ給ふ御座なりけるひとくあまたの御座に
うつらせ給ひありとる御かえさせ給ひ
あくるそこまでも見えけるにあはれなりける

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館